ライフイズユアセルフ　～ホワイトクリスマス編～

妻久詠透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ライフイズユアセルフ　～ホワイトクリスマス編～

【Ｎコード】
Ｎ６８８６Ｚ

【作者名】
妻久詠透

【あらすじ】
クリスマスイブ前日。札幌にあるとある喫茶店に、思わぬ来客者が訪れる。
「サンタを止めなければ、世界が滅亡する」
警告を発した本人は、赤い服に白いひげ。
果たして、世界は無事クリスマスを迎えられるのか。

ホワイトクリスマス編　１（前書き）

自分のサイトに掲載していますが、多少改変してこちらに掲載されてます。

ホワイトクリスマス編　1

「クリスマスが今年もやってくる～」
聞いたこともないような音程の歌を、透明なグラスを白い布で丁寧に拭きながら、マスターは陽気に歌っていた。
いつも通り白いワイシャツ、黒に紫のストライプが入ったネクタイ。そして黒いエプロンを着けているマスターは、なんだかいつもよりも御機嫌だった。
俺はというと、この人気のない喫茶店で、唯一のメニューであるミルクティーを飲みながら、まったりとした時間を過ごしている。

時刻は６時過ぎ。外は粉雪が降る、クリスマスシーズン真っただ中と言える雰囲気だ。どっから収入を得ているのかよく知らないが、この喫茶店も外にクリスマスツリーを飾っており、店の看板にもイルミネーションが施されていたりした。
２０日を過ぎてからというもの、やけにマスターのテンションが高い。どうやら、クリスマスが相当好きらしい。
「明日はクリスマスイヴですね。悠一は、夢奈とデートする予定とかないんですか？」
「何言ってんだ。あいつとデートするくらいなら、見知らぬおっさんと居酒屋で飲み明かした方が有意義だ」
「素直じゃないですね～。クリスマスが今年もやってくる～！」
笑みを浮かべながら陽気に歌を歌う。先程とはまた違った音程が奇抜に上下する歌を耳に入れながら、俺は美味しくも温かいミルクティーの入ったティーカップに口をつける。
「そういえば悠一。今年はサンタさんにどんなクリスマスプレゼントをお願いするんですか？」
マスターは拭き終ったグラスを棚に戻すと、俺にそんなことを聞

いてきた。
「何言ってんだ。俺はもう中学2年だぞ？サンタなんか信じているわけないじゃないか」
口をとがらせながらマスターに返答したが、俺はふと心の中で、本物のサンタが実は居るのではないかと思った。
そう思った理由は勿論、目の前にマスターというヴァンパイアの人間の混種が居て、なおかつ俺が今年見て来た色々な異形の者たちを未だ記憶しているからである。
読者諸君はよくわからんだろうが、この世には本当に“その類”の者たちが存在する。俺だって信じちゃいなかったけどな……。

そもそも、中学2年である俺に対して、サンタに何をお願いするのかと尋ねる大人はそう居ない。マスターは本当にサンタが居るから、俺にプレゼントに関する質問をしたに違いない。
「悠一、サンタさんは本当に居るのですよ？」
ほら……。
「私がサンタさんは本当に居るのですよ？って言う前に、心の中で、実はサンタさんて本当に居るんだなって思ったでしょう？」
うぉ……そこまで読まれたか……。
「サンタさんは、子供達にプレゼントを配るために、必死で準備をしているのですよ？年に一度しか働かないわけじゃありません。クリスマスという日のために、サンタさんは懸命に働いてくれているのです」
グリーンランドから世界中の子ども達へプレゼントを届ける爺さんのことを、世の子供達の大半は父親であると思っている。否、サンタ等という赤服の爺さんはこの世に存在しないと信じているはずだ。
勿論、例えそれが幻想なんかであっても、俺は気にしちゃいなかった。
そもそもクリスマスは、クリスマスとしての雰囲気が味わえれば

それで十分で、プレゼントはともかく、サンタの有無なんかにはまったく興味がなかった。
父親が「ほら、サンタさん今飛んでいったよ」と、居もしないサンタの存在に目を輝かせ、朝の粉雪が降る空を眺めていたのは、恥ずかしくも楽しい思い出の一つだ。
「伝承や物語としてサンタクロースの話は語り継がれています。この世は魔の類を拒絶する世界ですから、サンタのような親しまれている魔法使いも、本当に実在すると世に知られることはないでしょう」
「さらった言ったけど、サンタって魔法使いだったんだな」
俺は驚きもせず、漂々とした顔でマスターにそう言った。
「えぇ。魔法を使って世界中の子供達にプレゼントを渡すのです。トナカイが空を飛ぶ仕様ではなくて、サンタさんの魔法によってトナカイとソリは浮かんでいるのですよ」
こりゃ新説だ……。今までサンタが魔法使いだなんて説いた大人はそう居ないはずだ。
「魔法を使って空を飛び、人々の願いを叶えながらサンタは世界中を回るのです。煙突から一々家に入ってプレゼントを置いては埒があかないですからね」
子供の夢を壊すようなことを平然と言ってくれるじゃないか。
「空を飛んでいる時に魔力が尽きて、煙突にサンタさんが落っこちた時があったそうです。それがきっかけで、サンタさんが家に入る時は煙突っていう話が広まったんですよ」
にこやかな笑みを浮かべながらマスターは言うが、俺はその話がただの作り話にしか聴こえない。
マグカップに入ったミルクティーの最後の一口を飲み干そうとした時、店の天井に何か大きな岩でも落ちて来たような大きな音が鳴った。びっくりして手に持っているマグカップを落としそうになった。
マスターはカウンターから店の入り口へと向かい、扉をゆっくり

と開いてみた。
外は綺麗な粉雪が降っている。店の街灯で照らされていて、なお綺麗に映る。
マスターは店の外に顔を出し、辺りをきょろきょろと見回す。すると、一点を見つめて動かなくなった。
「マスター、なんかあったのか？」
俺は店の入り口に居るマスターに声を掛けたが、マスターは一切返答しなかった。呆然と立ち尽くしているままだ。
店の外から、か細い老人の声が聴こえてくる。
「お願いだ……助けてくれ……」
懇願する者の正体が一体何者なのか確かめようと、俺は席を立ち店の入り口へと歩み寄った。そして、マスターと同じく呆然と立ち尽くした。

ホワイトクリスマス編　1（後書き）

クリスマスが過ぎる前に、この小説を全てアップできますよーに

2

「えぇと……どういったご用件で、当店にお越しくださったのでしょうか？」

「急を要することなのだ。頼む、私の願いを聞き届けてくれ！！」

瞑らな瞳で懇願する老人。赤い帽子に赤い服。白ひげでメガネを掛け、外にはトナカイが赤い鼻をしながら、こちらの様子を伺っているようだった。どちらかといえばこの老人の方が願いを聞き届けてくれそうなもんだが。

隣に居る俺は、この赤服の爺さんはこの店の屋根を工事している途中で、ミスして落ちて来たのだろうと、確率的にとても低い事象を勝手に頭に浮かべて整理した。未知の世界が存在することを否定し、本物のサンタであることをいち早く頭の中から空にする。どうにも俺の胸中では、嫌な予感がぐるぐると渦巻いて離れないのだ……。

「それではまず、あなたのお願いをお聞かせいただけますか？」

「おぉ！聞いてくれるか！！それはありがたい！！」

席を飛び立ち、マスターに握手を求める。苦笑しながらマスターは握手に応じた。マスターの手が大きく上下する。こんなに激しい握手を見たのはアメリカのアニメを観て以来だ。

「私は見ての通りサンタなのだが、とあるサンタから世界を救うために、マスターを尋ねて来たのだ」

「えぇと、それはどういった意味で捉えればいいのでしょうか？あ

なたがスーパー等のお店で働いている従業員の方で、同じ同僚のサンタがあまりにも仕事をしないから経営の危機にあるということですか？」
「違うわい！どうしてそうなる！！わしは本物のサンタじゃぞ！」
ちらっとマスターの表情を伺ってみると、冷や汗が大量に流れているのがわかる。先程俺に対してサンタの知識を振りまいていたのに、いざ本物を目にするとどうしてこうも堅くなる？もしかして、さっき俺が聞いたサンタの話って……マスターの嘘？
「え、えぇと……本当に本物のサンタさん？トナカイの引くソリに乗って世界中を駆け巡る伝説の男ですか？」
「そう言われると照れるな……」
何頬を赤く染めてんだ。赤くなるのはトナカイの鼻だけで十分だ。
「サンタ界の中で、最も仕事ができるサンタが突然謀反を起こしたのだ。目的はまったくわからないが、明日の夜、子供達の夢を全て掻き消して、世界を滅ぼそうとしておるのだ！」
「え、どうして夢を掻き消すのが世界の滅亡に繋がるんだ？」
「夢を掻き消された子供達は無気力となり、何もやる気が起きずに、生きる夢も希望も失ってしまうのだ。君も例外ではないぞ？１８歳未満の子供達は全てそうなってしまうのだ」
「それは大変だ！」
大げさにリアクションをしているように見えるのは俺だけか、マスターは両手を大きく挙げて、ひぇぇ、と悲鳴を上げた。
どうにも、この場に居て緊張感がないのは俺だけらしい。どうしてサンタ一味でそんなことをしようとする奴が現れたのか、なんていう話はどうでもいい。

そもそも、本当にサンタが実在しているかどうかという議題から念密に話をしてほしいもんだ。この爺さんの頭のネジが五本くらい抜けているだけじゃないか？

「悠一。これはいけませんね。サンタさんを助けましょう！」
「助けるって言っても、どうすりゃいいんだよ。そのサンタがどうして世界を滅亡に導こうとしているのかがさっぱりわからない。そもそも、この爺さんが本当のサンタかどうかも疑わしい……」

俺が疑いの眼差しを爺さんに向けると、爺さんは頬の肉を大きく釣りあげて、満面の笑みを俺に見せて来た。いやいや、そんな顔されても怪しいもんは怪しい。

「わしがどうやってここまで来たかがわかれば、悠一君も信じるじゃろう。……しかし、問題が起きてしまってな」
「一体何があったんだ？」
「移動魔法を使うために一緒に居てくれなきゃいけないトナカイが今居ない」
「どうしてだよ。勝手にどっか行ってしまったのか？」
「最近餌を上げるの渋っていたからのぉ。餌を探してどっか行ってしまったわい」
「行ってしまったわいじゃないだろ！どう考えたって爺さんが悪いだろ！トナカイを餓死させる気か！？」
「トナカイがどこかへ行ってしまう前に、やけにわしの事を冷たく睨んでいたような気がするのぉ。クソジジイ、テメェのとこには二度と戻らねェ、死ね！みたいな」
「爺さん、心の中では少し罪悪感感じてんだな……」

俺は深くため息をつき、マスターにミルクティーのおかわりを頼んだ。相変わらず、この喫茶店のミルクティーは美味しい。それだ

けは疑う余地がない。

「どうしてそのサンタさんが世界の滅亡を企むのかはわかりませんが、まずはサンタさんを止めることから初めていきましょう。そのサンタさんに名前は？」

「彼の名はブラックサンタじゃ。名前の通り、服が黒く、他のサンタと比較せずとも奴だとわかるじゃろ」

「では、そのブラックサンタをおびき出し、どうにか彼の悪行を阻止するとしましょう」

とんとん拍子で話が進んでいく。外の雪がひどくなりつつある。窓から見る外の景色が俺の心を動かす。今のうちに帰らないと。

「サンタさんが来る好条件は、やはり子供が居ることでしょうか？」

「そうじゃな。例えば、夢や希望を胸に抱く少年少女の元には、特に来やすい」

「夢……ですか」

不穏な視線をマスターから感じた。目が開いているかどうかわからないくらい薄目なマスターの瞳がこちらを向いているかは定かではない。しかし、この時俺が不安に感じたことは確かだ。

3

「ちょっと悠一！どうしてこうなるわけ！？」
「俺よりマスターに意見を述べてくれ……」

１２月２４日。天気は悪天候でも快晴でもない。ちらちらと粉雪が降る、美しきホワイトクリスマスとなった。
午後６時、マスターの喫茶店である“ライフイズユアセルフ”に呼ばれた俺と幼馴染の淺倉夢奈は、唐突にマスターの私室である八畳一間に入れられた。そこにあったのは、二人用の布団のみ。この部屋に入った時、何をしろと言われたわけではないが、あれこれ頭の中で想像が膨らみ、夢奈と俺は顔を赤らめた。中学生故、そういった連想をしやすいのだ。致し方ない。

「これから、悠一と夢奈にはここで寝てもらいます」
「ね、寝てもらうってどういうことだよ！」
「そうよ！なんで悠一の隣で寝ないといけないわけ！？」
俺達が抗議すると、マスターは半にやけ顔でこう言った。
「これも世界を救うためですよ。イチャイチャしろだなんて誰も言ってませんよ？」
「最近の若者はけしからんのぉ」
ひょっこりとマスターの後ろから現れるサンタ。
「悠一と夢奈の魂は、地球上では類稀なる色をしています。ブラックサンタさんがあなた達を狙わないわけがありません。ここに現れた時に、私とサンタさんでブラックサンタさんを捕獲します！」
かくして、「ブラックサンタ捕獲大作戦！」（命名：マスター）が決行されることとなった。……俺と夢奈はまったく承諾してねぇぞ！！

俺達の不満は他所にやられ、俺と夢奈は一つ屋根の下、同じ部屋で服も着替えず寝させられることとなった。
布団は勿論くっつけているわけでもないし、相手はパジャマ姿で居るわけでもない。ただ隣で寝ているということを意識してしまうだけでも、顔が赤くなりそうだ。恐らく、夢奈も同じ心境のはず。中学生が体験するにはいささか早すぎるってもんじゃないか。

「どうしてこうなっちまったかな……」

ため息をつきながら、ゆっくりと目を瞑る。妙な緊張感から眠気はまったくない。寝れるとは思っちゃいないが、目をずっと開けたり、ましてや夢奈の方を見たりなんてできるわけない。しかし、ここでふと些細な疑問が浮かんだ。俺はこうして恥ずかしさを紛らわせようと目を瞑っているが、夢奈はどうしているんだろうか。
時刻は夜中の１２時近く。もう寝ていてもおかしくない時間だ。
俺は仰向けの状態から、ゆっくりと右隣に顔を向けてみる。すると、がちがちに固まった夢奈が、頬を赤らめながら天井のどこか一点を見つめていた。月明かりに照らされて鮮明に頬が赤く見えた。

「おい夢奈」
「何？」
「なんでそんな固まってんだ？」
「なんでって、そんなの言わなくてもわかるでしょ？」
「大体見当はついてるけどよ」

やっぱり、気にしているらしい。そらぁ、年頃の女の子が一つ屋根の下で男と一緒に寝るなんていったらそりゃ気にするに決まってる。そう考えていると、なんだか冷静になる自分が居た。この状況が他人から見るとそれは面白い構図であり、これからの展開に期待

するところだろう。皆さんにとっては残念だろうが、何も発展しやしないんだがな。

「悠一……なんだか……恥ずかしいよ……」

「状況と発言だけ聞くと誤解するような台詞を吐くな」

突然夢奈は虚ろ目で俺を見て来た。その表情がなんだか色っぽく見えた。いかんだろ中学生がこんなん！やっぱ色んな意味でまずいってマスター！

「……あれ、なんだか……眠くなってきちゃった」

緊張の糸が切れたのか、夢奈は眠たそうに片目を擦り、目を瞑った。

俺も唐突に眠気が襲ってきた。瞼が重たくなり、眠りにつきそうになった時、外から歌声が聴こえて来た。

「クリスマスなんて、大嫌いさ～」

マスターの独特な歌声ではない。聞いたことがない声だった。外で雪を踏みしめながら、この部屋に向かってくるのが感覚としてわかる。

一瞬意識が飛び、次に目を開けた時には、黒い服を着て、黒い帽子の先に白いふわふわの毛玉を付けた、黒ひげの爺さんが、夢奈の枕元に立っていた。

眠気が吹き飛び、体を起こそうとしても、金縛りにあっているように体が動かない。

「可愛い子み～つけた☆」

3（後書き）

次の話で「ホワイトクリスマス編」は終了です。

終了後は「滅亡予言編」のアップに戻っていきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6886z/

ライフイズユアセルフ　～ホワイトクリスマス編～

2011年12月25日00時47分発行